国土社の新作童話

台風岬の子ら

久保　喬・作／岩淵 慶造・絵

■著者紹介　久保　喬

1906年愛媛県宇和島市に生まれる。東洋大学東洋文学科中退。処女作『光の国』で児童文学の世界にはいる。作品には『ビルの山ねこ』（小学館文学賞）『海はいつも新しい』『南の島の子もりうた』『ネロネロの子ら』『少年の石』『赤い帆の舟』（日本児童文学者協会賞）『火の海の貝』（サンケイ出版文化賞推せん）『歌をうたう貝』『サルが書いた本』『黒潮三郎』など多数。

＊現住所＝〒176
東京都練馬区中村南3-16-4

■画家紹介　岩淵慶造

1942年青森県弘前市に生まれる。子供の頃より絵をかきはじめる。亜細亜大学卒業後，商業デザインを手がける。1967年よりさし絵をはじめる。作品には『少年ヤポルの島』『あのころはフリードリヒがいた』，近作として『少年ツイガのぼうけん』など。

＊現住所＝〒156
東京都世田谷区上北沢
1-18-15-304

913

久保　喬
台風岬の子ら
国土社　1978
104P　22×19cm（国土社の新作童話7）

基本カード記載例

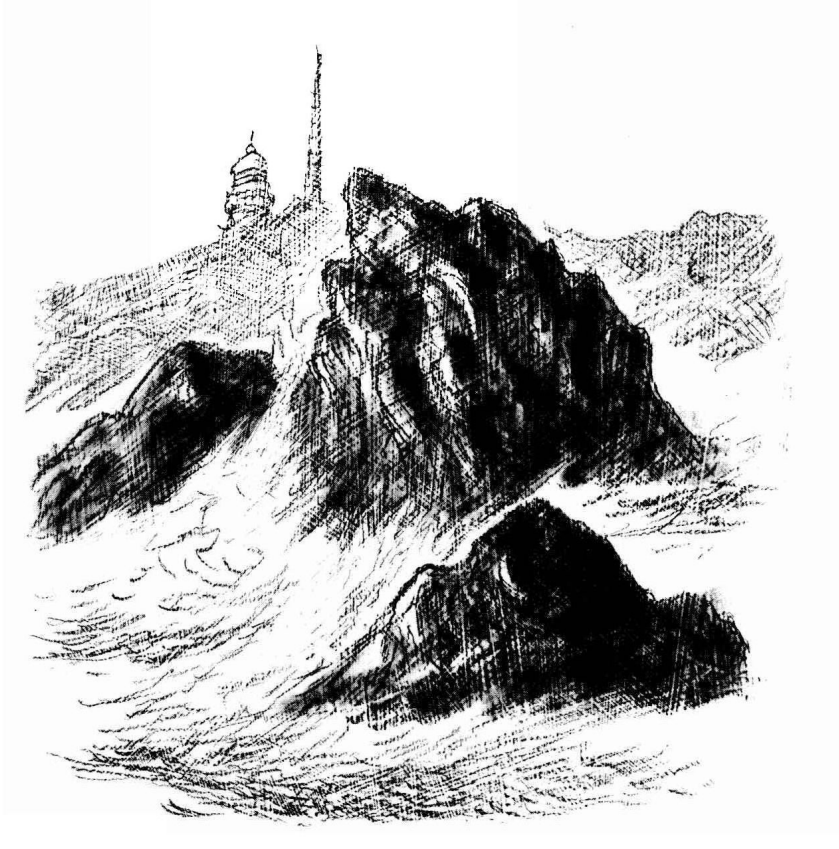
台風岬の子ら　**〈国土社の新作童話7〉**

著　者　久保　喬　©1978
1978年9月25日初版発行
1978年12月15日再版発行
発行者　長宗泰造
印刷所　厚　徳　社
発行所　国　土　社
〒112　東京都文京区目白台1丁目17-6
電話　東京943-3721／振替　東京6-90631

落丁・乱丁の本はお取りかえします。　**〈検印廃止〉**
定価980円

台風岬の子ら

久保　喬・作／岩淵慶造・絵



でえらんぼうが　くる

岬のはしの岩だらけの高いがけが、大きなけものの頭のように　海の中につき出ている。そこには　木も草もなく、下の岩根にうちよせる波がくだけて　ごうごうとさわいでいる。

子どもたちは、がけの上で、みょうな歌をうたいながら、手に手に持ったオモチャを　ばらばら　海の中へ投げこんでいた。

〈風は　いらんぞ、でえらんぼう
　風を　よこすな、でえらんぼう

投げるオモチャは、ワラであんだ人形や、板ぎれの舟、竹の馬、竹の笛など、子どもたちがめいめいに作ったものだ。

「なぜ、あんなことをしているんだろう。」

がけのそばの小道に立って、信がひとりでながめていると、うしろからやってきた年よりが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「あれはのう、むかしからの　村の行事じゃ。」
と、土地っ子でない信に　教えるようにいう。
「ずうっとむかし、このあたりにな、でえらんぼうという　からだのとてもでかい　大男がおった。そやつが　どすん、どすんとあるくと、山も岬も　ひとまたぎで、岩でも木でも　ふみつぶし、ひねりつぶす。
そやつが食う物ときたら、麦やヒエを　毎日四斗（約七二リットル）、生魚、干し魚五百匹。こんな大食らいがおっては　土地の者らは　難儀をする。
それで、ある日、でえらんぼうが　浜で昼寝をしていたあいだに、村の者らが、まわりで　ごんごん火をたいた。目がさめた　でえらんぼうは、あつう、あつうと、海の中へ　ざぶざぶはいって、しかたなく、そのまま遠い国へわたって行ったそうな。
でも、その時、村の人らの　火に追われて、あわてたはずみに、背中にせおったわが子を　海に落として死なせてしもうた。でえらんぼうは、かなしがって、

「あの子を　かえせえ。」
と、おうおう泣いた。ほえるような　その泣き声が風になり、こぼすなみだが　大雨になった。
　それからのち、でえらんぼうは、毎年一度、そのころがくると、むすこを死なせたことを思い出す。そして、急にかなしくなって、はらをたてて、人間どもへ　仕返しにやってくる。それが　夏のおわりか　秋のはじめにくる　台風じゃ。このへんでは　でえらん風というておる。そのでえらんぼうがくるのを、村の子らが　とめるのじゃ。」
　オモチャを海へ投げるのは、でえらんぼうの死んだむすこへ、じぶんたちが作ったオモチャを　ほうってやって、でえらんぼうへ、風をよこすな、あばれないでくれと、なだめるのだという。
「それというのも、むかしから、このへんでは、台風で、家をこわされ、舟をこわされ、作物をあらされ、そして、死人や　けが人も出る。ひどい目に　たびたびあわされつづけてきた。それで、村の人たちが　でえらんぼうがくる　といい、子どもたちまで　あげな行事をするようになったの

じゃな。」

話すうちに行事がすむと、年よりは村の子たちへ、

「おうい、みんな、はよう家へかえれえ。はよう風よけの手つだいをせえ。」

そうどなると、子どもたちは、すぐにばらばら、岬の道へ引き返して、村の方へ　坂をかけおりていく。

岬をとりまく　海の上いちめんに、はい色の雲が低くおおってきていて、それがどんどん　とぶようにはしっていく。

さきがた　テレビのニュースで聞いた警報は、

「――琉球列島を通過した台風は、太平洋上で勢力を増し、九州、四国の南部へ近づきつつあります。中心の気圧九八〇ミリバール、風速三〇メートル以上の暴風――」

と、いった。その台風の前ぶれの空模様だなと　信も思う。

四国南端のここの岬は、日本本土でも　一ばんたびたび台風が通過する所として　知られているのだ。

岬の横の　浜のほうから、

「えーさー、おうさー」

と、大ぜいの人のかけ声が　聞こえる。

あらしにやられないように、港の漁船の大型のは　つなぎ合わせ、小さいのはみんな　陸へ引き上げている人らの　声だ。

村のあちこちの家から、カン、カンと音がするのは、窓の戸が　ふきとばされないように　釘づけにしているらしい。子どものわめく声も　聞こえる。

ものさわがしい空気の中で、信だけは何もしないで、坂道に立っている。

信はまだ　村の台風を知らない。台風といえば、信のむねの中にうかんでくるのは、一年ほど前の秋のこと、東京の台風の夜の思い出だった。

家の　あらし

そのばん、信は電燈もテレビも消えた　アパートの部屋に　ひとりですわっていた。窓の外も　停電のやみに黒くぬりつぶされた夜の街に、はげしい雨と風にまじって　何か大きな物がふき飛ばされる音や、けたたましい警笛のひびきなどが　聞こえていた。

だが、信の心には、そんな外のあらしよりも、べつの不安が　重くのしかかっていた。

「お父さんも、お母さんも、どこへ行ったのだろうか。」

おとといから　行く先もわからなくなった父。そして、母も、昼すぎに学校から帰った信と　入れちがいに、どこかへ出かけて行ったきり、夜ふけになっても　もどってこない。

信はひとりで　インスタントのラーメンを食べたりしているうちに、外の風雨はひどくなり、停電になってしまった。やみの中に　寝ころびなが

ら、

（これで、もう　ぼくのうちもおしまいか）

と、いう気がしてきた。

父が仲間と共同経営でやっていた　電気器具製造の小さな工場が、ふた月ほど前につぶれてしまった。そして、一家もそれまで住んでいた家におれなくなって、今の　せまいアパートの部屋へ　引越してきた。

その後も父は、従業

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

員への給料の未払いや、金を借りた所への支払いなどに　こまっていた。おしかけてくるそんな人たちへ、いろいろいいわけをしたり、毎日　ほうぼうへ出かけたりしていたが、そのうちに、とうとう家へもどってこなくなったのだった。

台風のすぎたあくる日、母は　ひとりで帰ってきた。遠い親類や　知り合いの人の家などをまわったが、父のゆくえは　やはりわからないという。

四、五日して、母は　大きな工場の雑役婦になって　毎日出かけて行くようになった。

それからの信は、ひとりで、アパートで　るす番役だった。でも、テレビを見たり、マンガ雑誌をくり返し読んだりしても、あまり楽しい気にもなれない。

友だちは　ひとりもなかった。引越しで　転校してきた学校では、はじめての教室で、今までとちがう国語の本を読まされて　つかえてしまった。どもった信は、スタートから　級友たちに笑われた。復習なども　やる気がなくて、テストがあっても、前にいた学校の時などとは　くらべものに

ならないくらい　成績が落ちてしまった。
でも、今思い出しても　一ばんいやだったのは　図工の時間。生徒たちが　校庭で飼っているウサギを写生したときだ。信は　ウサギの毛の色を、白と赤の色でぬった。すると、先生が、
「ウサギを　赤くぬるのは　変だね。」
と、いった。だが、信は、
「日なたの光線で、ウサギがそんなに見えたんです。」
というと、
「いや、君以外には　赤くぬっている者は　おらんよ。」
「あれ、紅白のウサギなんて　めずらしいな、おめでたいウサギかな。」
という　だれかの声もして、みんなに　どっと笑われた。
前にいた学校では　絵は得意だったのだが、こんなことがあってからは図工のある日が　いやになった。そのうちに、学校へいくのも　だんだんつまらなくなった。
――それから、一年ほどたったが、父は　いまだにゆくえがわからず、

ただ　母があるスーパーの店員に変わったぐらいで、信はやっぱり友だちもなく、遊びにいくところもない。

母にいわれて、学習塾にはいったけれど、二回通ったきりで、そのつぎからは　塾へも行かずに　町の中をうろうろした。

梅雨明けも近いある日、町中の歩道橋の手すりにもたれて、ぼんやりあたりを見ていると、にわか雨がふってきた。家まで　かけて帰りかけたが、とちゅうの道ばたにある　広いあき地に、もう使えなくなった　古い自動車が　いっぱいおかれている所へきた。

その廃車のむれの中の一台のドアが　開けっぱなしになっていたので、信は　そこへとびこんだ。そして、もう半分やぶれかけている座席のところへこしをかけて、雨やどりをしていた。だが、すぐに雨のやむ気配はなく、ついうとうととねむってしまった。

目をさますと、いつのまにか、車の外は雨があがって、うす暗くなっていた。

その日暮れの光の中に　いっぱいならんでいる廃車のむれ。それらのガ

ラスの窓の中には、人かげは一つも見えない。どの車も　じっとしていて死体のように動かない。そんなからの廃車ばかりに　とりまかれていることが、信には　急にぶきみな気がしてきた。

その時、人の声がして、近づいてきた　ふたりのおとなが、信がはいっている車の窓をたたいた。

「おい、何をしてるんだ、出てきなさい。」

通りがかりの　勤め人らしい人と、買物帰りの　おばさんだった。

信が出ていき、

「雨がやむのを　待ってたの。」

と、低い声でいうと、

「それならよかったわ、あんな所で寝ているから、どうしたのかと思ってね。うちは近くなんでしょ。さあ、早く帰るのよ。」

そういって、そのおばさんは、そばの男の人へ、

「近ごろは、子どもの自殺なんていうのも　よくあるでしょう。そんなんじゃあないかしらと思って、気になったんですよ。」

と、いった。

そのまま信は帰ってきたが、雨にぬれてうたた寝をしたせいか、かぜを引いて、四、五日寝こんでしまった。学校を休むうちに、まもなく夏休みになった。そして、毎日母が出て行ったあとは、あいかわらずひとりきりで　ただぼんやりと　寝ころんでいた。何もする気にもなれない。おもしろいこともなかった。

すると、ある日の夕がた、ふいに、ドアをたたく音がするので　開けてみると、背の高い男の人が立っていた。

「ああ、達おじさん――」

それは母の弟にあたる、まだ若いおじだった。母の郷里の四国の高知県のある漁村で、遠洋漁業の船乗りをしている。

まもなく　母が勤めから帰ってくると、

「ねえさんの手紙見てね、気になったもんだから、ちょっとようすを見にきたんだよ。それに、ちょうど勤めの用事もあったのでね。」

と、達おじはいって、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com